高乘勲編

高孝廉集

（校本）

古典文庫

高乘勲編

蒙好家集

（校本）

古典文庫

古典文庫第一八三冊

昭和三十七年十月二十日　印刷発行　（非売品）

編者　高乗勲

発行者　東京都北区西ケ原町三ノ三四　吉田幸一

兼好家集

印刷所　東京都板橋区熊野町三四　帝都印刷製本株式会社

発行所　東京都（巣鴨分室局区内）北区西ケ原町三ノ三四　古典文庫
電（九一一九）二七一一七
振替口座東京一四五九七番

目　次

兼好家集（西荘文庫本）**複製**……一―五一

○

一、解　題……三

二、兼好家集（校本）……四九

三、兼好家集初句索引……一五一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

解

題

西荘文庫旧蔵「兼好家集」について

高　乗　勲

一、西荘文庫旧蔵本

兼好法師家集は、従来前田家尊経閣所蔵の兼好自筆と推定されている自撰家集と、その伝写によるものと考えられているものが、その殆どである。しかるに先年家蔵に帰した西荘文庫旧蔵の「兼好家集」はそれらの諸本とかなりの異同をもつた一異本と見るべきものである。

この写本は大版の薄様の楮紙を半切にし、それを二つ折りにして袋綴にしたものである。縦二〇糎、横一三糎の小形本である。表紙は本文と同じ用紙であり、紙縒綴のものである。表紙中央に直接に墨で「兼好家集」と書いている。表紙右肩に三糎に十二糎の白紙を貼付し「伎全」と墨書、西荘文庫の蔵書印がおされている。これは西荘文庫の整理番号であろう。墨付二十五枚、前後に白紙はない。

すべて一面十三行に書かれている。第一枚目表一行目に「家集事」と書いて、つづいて一枚目裏二行目までに、前田本の「家集事」と同文が書かれている。三行目は一行あけて、

祈恋　新後拾遺

いかにせん神の受（け）ける御祓とて見し面影もわすれはてなは

と書きはじめ、二十五枚目表第一行目に

かりへこぬわかれをさてもなけくかな西にとかつはいのる物から

とあるまで、すべて歌は一行に書き、総数は和歌三百首、連歌二句が載せられている。「かへりこぬ」の歌につづいて、中院通村の跋が書かれ、その次に、「本云」として寛文四年刊の「兼好法師家集」の弘文院林学士（林道春の三男の林春斎）の跋文を転写し、更にそれにつづいて、次の識語がある。

寛文七丁未於禅林寺丈室潤二月中澣日書写焉記（記は訖の誤写か）

本云

此冊禅林寺於丈室うつし給ふ祖栢師筆跡。蒙御免書写せん事をこふ。禅師曰、

一樹の陰一河あささなかれ結ふ事は、御法の海のえにしふかければ也。会者定離是また常なり。わかれなん後の形見共見む。諸共に筆のあとをとりかはしての仰(せ)、いなみかたく、彼おもむきにしたかふ事になりぬ。

鼎峯隠士良識

むすふてふおなしなかれを露の身のさえなは水のあはれとも見よ

干レ時寛文十庚戌正月廿一日、及夜陰ニ祖柏老之本以写レ之ヲ　和氏承□花押

この奥書によると、寛文七年二月中旬に、禅林寺（永観堂）で、祖柏師なる人が以前に書写したものに、鼎峯隠士なる人が識語を書いた写本があつて、その写本を寛文十年正月和氏某が書写したものがこの写本であることが明らかである。

従来流布している兼好法師家集は前田本の伝写系統と考えられるものがそのすべてである。ところが西荘文庫旧蔵本は前田本とかなりの相違がある。今、現存の兼好家集の主なるものと考えられている、前田本、寛文四年刊本、群書類従所収本と、家蔵の前田本臨写本と考えられる一本の四本と比較し、その異同を示して、西荘文庫旧蔵本の性格を明らかにしたいと考える。

二、前田本との比較

前田本との異同の主なものは次の諸点である。

一、「家集事」の次に前田本は「はるのころよりこむといふ人の……」の詞書をもつた「春もくれ……」の歌が一首あり、空白が約二面分あり、四枚目裏の最後二行に「いし山にまうつとて……」の詞書にはじまつて本文が書かれている。ところが西荘文庫旧蔵本（以下西荘本と略称）には「家集事」が巻頭にあることは前田本と同じであるが、この「家集事」につづいて一行分だけあけて「いかにせん神の……」の歌から「めぐりあふ秋こそ……」の歌に至る十五首が「石山にまうつとて……」の前に存在していることである。前田本の「春もくれ……」の歌はこの十五首のうちの十番目にのせられている。

二、前田本の巻末には中院通村の跋があるだけであるが、西荘本にはその他に、既記のように弘文院林学士の跋以下の識語が存在している。

三、前田本に見せけちされているものは西荘本ではそのほとんどが除かれている。ただし、三五番の歌の次の「ならひそと……」の歌は前田本では見せけち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

されているが、西荘本ではこれを生かしている。

四、　一四三番の詞書のうち、前田本には「……人のもとよりかうほしやとおりくによみてをこせたる」とあるのを、西荘本は「……人のもとより」とあつて、以下を省いている。

五、　八九番、九〇番の詞書が前田本と異つていて、西荘本には八九番の詞書に「かのえさる、五月廿日比御子左の中納言殿かのえさるに」となつていて、九〇番の詞書には「五月廿日ごろ御子左の中納言どのの庚申に」の語がない。

六、　前田本における人名の朱書の傍記は西荘本ではそれぞれ詞書の中の人名のうちに加えられている。ただし、五六番、六五番、一四六番、一五〇番の歌の傍記は詞書の中に取り入れられておらず、また傍記もされていない。

七、　前田本には十六個所に、勅撰集およびその他の歌集に採取された歌には朱書で、その集の名がそれぞれの歌に頭注されている。ところが西荘本ではそれが全部詞書の次に記入されている。なお巻頭の十五首の中の勅撰集に入集したものにも同様その歌集名が歌の前に記入されている。ただしその勅撰集名が誤

記されているものがある。

八、　前田本の二二五番の「おとろかす……」の歌が西荘本には存在しない。

九、　西荘本の明らかに誤写と認められるもの（算用数字はすべて、岩波文庫本「兼好法師家集」に示す歌の番号を示したものである。以下すべて同じ）括弧内は前田本本文。

「家集事」の条　思之也（思ゝ也）

16はうりへに（ん）18仏界に供せぬ（む）

21なけくたひ（きわひ）32待りける（侍）

43春もおらなん（はや）53過る人（す）

59我はかて（り）59ならはさりけり（れ）

68あまつさへ（あつま）

68もうつくへし（てくへき）93ふるまて（も）

102後宇田院（多）106ゆくこの花（て）

112色も匂ひし（も）122聞もよし（う）

137 いとはゝかくと（も）137 まよふぬれ（ひ）
141 浪たつるなか（なゆめ）142 うまれこし（て）
161 こりにもせて（「に」なし）171 雪さえて（霜）
175 大学寺（覚）209 山野の山里（小）
226 名残成けん（れ）235 千代のあるかす（り）
254 なとかちるらん（は）277 といはせられ（仰せ）
277 なりとし（か）283 かすむと（を）

右のうち二七七番の詞書の「と仰せられて」は岩波文庫本には「といひをかれて」と読まれている。「高」本には「といはせられて」と書かれ、「寛」「群」本には「とおほせかけられて」となつている。しかし前田本の文字は「仰」の草体が筆勢長く書かれているため「いはせ」とも、また「いひを」とも読まれるが、これは「仰せられて」読むべきものである。

一〇、西荘本の誤脱と認められるもの

前田本に存在し西荘本に存在しないもののうち次にあげるものは、おそらく西荘本の誤脱と考えられるものである。これらは二番の歌の詞書「又」が「寛」「群」の両本に存在しないほかは、すべて西荘本に脱落しているだけで、「前」「高」「寛」「群」の四本に存在しているものである□内は脱落を示す。

2 (詞)「又」なし(これのみ寛群にもなし)

9 (詞) 大納言殿のくるまより使の

12 (詞) 絶えて久しき恋と

25 (詞) 結縁経の歌

31 (詞) 今宵とたのめける男

32 (詞) 木高き松のこのまより

75 (詞) 此所の名を句の

126 (詞) あやしき所にたちいりたる

134 (詞) かしまの社の哥

140 (詞) その歌の一字を

149 (詞) 哥つかふまつりしに

177 (詞) ある人のもとにて

190 (詞) 心地そこなひてこもり侍しを

230 (詞) 若き男のいと念比に

270 (詞) 哥よませられ侍しに

271 (詞) 春といふ事をよませられ侍しに

274 (詞) 松の尾の花見に

277 (詞) 引留られしかは

一一、西荘本には、その親本に既に虫損などのため判読し得ない部分があつたの

で、その個所が空白として残されたものと推察される個所が次の三個所ある。

43　花の□を（他本「にしき」とあり）

63　かたみにしたへ□の秋風（他本「松」）

106（詞）山路□（他本「花」とあり）

一二、前田本と本文が異つていて、単なる誤写とは考えられず、訂正したものではないかと認められる個所。括弧内は前田本の本文である。

（巻頭家集事）人不可然（「前」「高」可なし「寛」あり）

4　跡つけて（は）

31　わかかたならぬ（ため）

32（詞）冬の比（夜）

32　軒はしのふ霜さえて（のきのしのふに）

38　あかぬなかめは（にほひ）

56（詞）木末の残雪（木の残の雪）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton